様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：２１４０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０３０９２

研究課題名（和文）第二次世界大戦後の国際秩序再編における内モンゴル問題に関する研究

研究課題名（英文）The Inner Mongolian issue in the reorganization of international order after the Second World War

研究代表者
ガンバ　ガナ（GANGBA, GANA）

国際教養大学・国際教養学部・助教

研究者番号：９０６２４８２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦後の内モンゴル問題をめぐる国際情勢が、中ソ蒙関係を中心に、いかに展開されていたかという問題を取り扱った。方法論として、当時内モンゴル自治運動の指導者徳王が、招聘されてモンゴル国に渡ったものの、結局中国に送還されたこと、戦後多くの内モンゴル人が南北モンゴルの統一の夢を抱きながら、モンゴル国に渡ったものの、結果的に「国家」と「民族」の挟間に運命を翻弄されることとなったこと等、具体的な事例に焦点をあてながら検討を実施した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究成果として、多くの学会発表を実施した以外、『２０世紀前半とモンゴル人』『内モンゴルと当時の国際情勢』という二冊の本を出版した。それによって、第一に、中ソ蒙の間で内モンゴ問題がいかに取り扱われていたかという問題を明白にした。第二には、戦後モンゴル国に渡った多くの内モンゴル人が、その後、どのような運命を辿ったかという問題を検討することに通じて、中ソのモンゴル政策の一面を解明した。いずれも、今まで取り扱われていない問題なので、その学術的意義と社会的意義がとても大きい。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to analyze how the Inner Mongolian issue was decided among China-Soviet and Mongolia after the Second World War, by focusing on the case of Prince Demchugdongrob who was the leader of Inner Mongolian autonomy movement and had been invited to go Outer Mongolia, but eventually extradited to China, and the case of many Inner Mongolians who went to Mongolia with the dream of the unification of Southern and Northern Mongolia, but finally were tossed about by the fate of hovering between “State”(Guo jia) and “Race” (Minzu). Thereby, clarify the nature of Inner Mongolian issue in the reorganization of international order after the Second World War, as well as some aspects of China and Soviet’s Mongolian policy.

研究分野：モンゴル近現代史

キーワード：内モンゴル　中ソ蒙関係　戦後

１．研究開始当初の背景

「モンゴル」は現在、事実、国境に分断された政治状況に置かれている。なぜこうした状況が生まれたのか、原因は何だったのか。これは多くの研究者が長年問い続けている課題である。いずれにせよ、当時の国際情勢の動態、つまり 20 世紀前半のいわゆる「蒙古問題」をめぐる国際関係が大きな影響を与えたことには違いない。しかし、従来の研究では、多国間関係からモンゴル問題にアプローチする際、独立国である外モンゴル問題を取り扱うことが多く、内モンゴル問題は等閑視されるか、地域問題としてしか取り上げられてこなかった。

では、20 世紀前半の内モンゴル問題とそれをめぐる国際情勢を無視して、近代モンゴルの政治史を語ることは可能であろうか。答えはおそらく「ノー」であろう。なぜなら、1911 年の独立宣言によって外モンゴルが事実上の独立を勝ち取った後､内モンゴル地域はその跡を継ぎ、国際舞台に「問題」として登場し、大国同士の熾烈たる利権争いの中に晒されていた時期があり、その結果が今日の国境をまたがる政治状況を形成したからである。

本研究はこうした問題意識から、戦後、中ソ蒙の間で、内モンゴルの問題がどのように話し合われてきたかということを検討した。

２．研究の目的

本研究の目的は、戦後、中ソ蒙の間で内モンゴル問題がいかに話し合われていたか、という問題を、当時内モンゴル自治運動の指導者徳王が、招聘されてモンゴル国に渡ったものの、結局中国に送還されたこと、戦後多くの内モンゴル人が南北モンゴルの統一の夢を抱きながら、モンゴル国に渡ったものの、結果的に「国家」と「民族」の挟間に運命を翻弄されることとなったこと等、具体的な事例に焦点をあてながら検討し、それによって、第二次世界大戦後の国際秩序再編における内モンゴル問題のあり方､並びに中ソのモンゴル政策の一側面を解明する。

３．研究の方法

本研究に関係する諸国家・地域の関係する諸文書館・図書館に足を運び、史料収集を行う。また､収集した史料のもとで､設定された課題に焦点を絞りながら検討を加え､それによって、中ソ蒙関係における内モンゴル問題のあり方、並びに中ソのモンゴル政策の一面を解明する。

４．研究成果

以下「主な発表論文等」に述べる学会発表や図書の出版等の一連の研究成果を通じて二つの問題を明らかにした。

第一､第二次世界大戦後の国際秩序再編の際の内モンゴル問題のあり方を解明した｡つまり、戦後の内モンゴル問題をめぐる国際情勢が、中ソ蒙関係を中心に、いかに展開されていたかという問題を明らかにした。この問題について、いくつかの研究成果はあるが、いずれも、終戦直後の時期に焦点を与えており、中華人民共和国成立直前に西部内モンゴル自治運動を発動した徳王の問題まで言及していない。したがって、当時、成功の可能性がほぼゼロであったにもかかわらず、なぜ徳王は再び自治運動を始めたのか、なぜ客として招かれてモンゴル国に行ったにもかかわらず、結局、中国に送還されることとなったのか、その背景には、どのような外交上の取引があったのか等、一連の問題は未だ謎に包まれている。モンゴル国へ渡った背後にはモンゴル国内務省のかかりわりがあったことが最近の研究で明らかになっているが、モンゴル国は最初から、逮捕のため徳王をモンゴル国まで招いたのか、それとも招いた時点では、逮捕するつもりではなかったのか。もし前者にあたるなら、その陰謀の黒幕は誰だったのか。もし後者にあたるなら、その後何があったのか。いずれの背後にもソ連の影があったとの推測は可能であるが、立証は必要である。日ソ蒙関係の中の内モンゴル問題を語る上で、この点はきわめて重要な課題であり、本研究によって、その一部が明らかとなった。

第二には、戦後モンゴル国に渡った多くの内モンゴル人が、その後、どのような運命を辿ったかという問題を解明した。

内モンゴル人の外モンゴル革命への参加といえば､1911 年の外モンゴルの独立宣言まで遡ることができる。当時、多くの内モンゴル人が外モンゴルへ渡り、モンゴル民族の独立事業に熱心に参加していた。しかしその後、中露蒙の間で「キャフター条約」が締結されたため、それらの人々は、バーボジャブの挙兵事変に代表されるように､「国家」と「民族」の境界線の上に彷徨うという運命を余儀なくされた。実は同様の現象は終戦後にも起きた。内外モンゴル統一の夢を見て、多くの内モンゴル人がモンゴル国へ渡った。しかし「ヤルタ協定」「中ソ友好同盟条約」等大国同士の一方的な条約によって、内モンゴルの独立問題が否定されたため、それらの人々はまたも、以前のように､「国家」と「民族」の境界線の上で彷徨するという運命を繰り返すこととなった。後にそれらの内モンゴル人の一部は帰郷したが、待っていたのは､「モンゴ

ルのスパイ」、「裏切り者」等のレッテルであり、特に文化大革命期に、ことごとく糾弾され、弾圧の対象となった。一方、モンゴル国に残った者たちも、決して幸運だったとは言えない。モンゴル人でありながら、「中国人」として扱われ、主流社会から疎外されるというものであった。中には徳王の長男ドゴルスレンのように、粛清のターゲットになった者もいる。共にモンゴルの独立のために戦った人々は、なぜここに至って、このような運命を辿らなければならなかったのか。そこには、ソ連のモンゴル政策、すなわちモンゴル国をハルハ部族中心の国家として作り上げようとした思惑があった。これらの問題は、内モンゴル近代史を語るにあたって、非常に重要な課題であり、本研究によって、その一部が明らかとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　1　件）

① ガンバガナ、戦前期内モンゴルにおける漢人商人の実態、地域文化研究、査読有、466、2017 年、pp. 67、85

〔学会発表〕（計　10　件）

① ガンバガナ、「朝日新聞写真資料館に保管されている徳王に関する映像資料について」、国際モンゴル学会アジア大会：「２０世紀のモンゴル世界：回顧」（於：昭和女子大学）、2018 年 11 月 3 日

② ガンバガナ、「ドゴルセレンについて」、国際会議：「20 世紀前半のモンゴルの歴史と文化」（於：国際モンゴル学会）、2017 年 8 月 28 日

③ ガンバガナ、「モンゴル史の視点からみた一帯一路」、第四回アジア未来会議（於：韓国ソウル）、2018 年 8 月 25 日

④ ガンバガナ、「戦後モンゴル国に渡った内モンゴル人について」、第四回アジア未来会議（於：韓国ソウル）、2018 年 8 月 25 日

⑤ ガンバガナ、「日本のマスメディアから見た内モンゴル自治運動」、第二回 20 世紀モンゴルの歴史と文化国際会議（於：モンゴル国立大学）、2018 年 8 月 18 日

⑥ ガンバガナ、「戦後の国際秩序再編における内モンゴル問題」、北海道大学研究会（於：北海道大学）、2018 年 7 月 29 日

⑦ ガンバガナ、「20 世紀前半における日本の満蒙問題について」、オーストラリア国立大学研究会、2017 年 6 月 27 日

⑧ ガンバガナ、「徳王の試み」、2017 年度モンゴル学術交流会（於：昭和女子大学）、2016 年 10 月 29 日

⑨ ガンバガナ、「. 内モンゴル自治運動におけるノモンハン事件の地政学的な意味」、第３回アジア未来会議（於：北九州大学）、2016 年 9 月 30 日

⑩ ガンバガナ、「20 世紀前半のモンゴル民族解放運動と徳王」、第 11 回国際モンゴル学会大会（於：モンゴル国立大学）、2016 年 8 月 16 日

上記の他、２０１７年と２０１８年に二回にあたって、モンゴル国で、「20 世紀モンゴルの歴史と文化国際会議」という国際会議を組織した。多くの専門家たちが参加した。

〔図書〕（計　1　件）

① ガンバガナ、Udamsoyol 出版社、20 世紀前半とモンゴル人（第一巻）、2017 年、367

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

○取得状況（計　　件）

〔その他〕

ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。